



TITLE:

ヒンドウスターニー音楽の成立
ーペルシャ語音楽書からみる北イ
ンド音楽文化の変容ー(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

井上, 春緒

CITATION:

井上, 春緒. ヒンドウスターニー音楽の成立 ーペルシャ語音楽書からみる北インド音楽文化の変容ー. 京都大学, 2017, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20502>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2018-03-22に公開

京都大学	博士（地域研究）	氏名	井上 春緒
論文題目	ヒンドゥスターニー音楽の成立 —ペルシャ語音楽書からみる北インド音楽文化の変容—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本博士学位申請論文は、北インドの古典音楽として知られるヒンドゥスターニー音楽について、それが西アジアの音楽文化の強い影響を受け、イスラーム時代以降に発展したという従来の見解を承け、その具体的な文化融合の有り様を種々の音楽文献、特に前近代のインド、イランで著されたペルシャ語音楽文献に見えるリズム理論を手がかりに解明しようとするものである。</p> <p>第一に序章において、先行研究のまとめと問題点の指摘、本論文の目的とそれを実現するための手法、用いる材料について予め説明がなされている。</p> <p>第一章「インド音楽の理論」では、本論の主たる題材であるインド音楽の基本的用語、音楽様式などが説明され、とりわけヒンドゥスターニー音楽をささえるメロディーとリズム、すなわちラーガとターラについてその概略が述べられる。あわせて、本論文が、ラーガ研究に比して従来ほとんど顧慮されてこなかった、リズム理論たるターラに焦点をあてることで、より十全なヒンドゥスターニー音楽理解を目指すことができるという点が、先行研究の蓄積の偏向性や音楽理解の方法との関連で強調される。</p> <p>第二章「ペルシャ音楽の理論」は、イスラーム時代インドに影響を与えたとされる、ペルシャの音楽文化について、10～16世紀頃に著されたアラビア語およびペルシャ語音楽書に見えるイーカーウと呼ばれるリズムの理論を検討し、音の持続する長さを、点としての拍と拍の間の距離として把握するという、イスラーム期西アジアに見られる音楽論、リズム論の論理的科学的特徴を抽出している。</p> <p>第三章「前近代ペルシャ語音楽書におけるリズム理論」では、分析の材料とするペルシャ語音楽書の文献としての性格と、資料としての意義を明らかにし、15～16世紀にイランで著された音楽書2点、14～18世紀にインドで著された音楽書4点を題材として、個々の文献においてそれぞれリズム理論の解説がどのようになされているのかを、詳細かつ丹念に紹介し、比較の材料を提示する。</p> <p>第四章「ターラとイーカーウの比較と関係についての考察」では、前章を承けて、ターラとイーカーウの具体的な内実、構造、時代による変化を詳細に比較し、両者の相違点の検証、インド的リズム理論がペルシャ的リズム理論の用語を用いて表現されるようになった時期の特定等、二つの音楽文化の具体的融合過程の描写を行っている。</p>			

第五章「ヒンドゥスターニー音楽の演奏からみるインドとペルシャのリズム理論」では、前章までで検証した、インド的リズムとペルシャ的リズムが、現代におけるヒンドゥスターニー音楽の演奏に実際に聴取できるのかという点を、典型的ヒンドゥスターニー音楽の演奏楽器であるタブラー（太鼓）のソロ演奏および、サントゥールとの合奏の中にさぐり、それらが確かに現代の音楽にも痕跡をとどめていることを例示する。

「結論」においては、ペルシャ語音楽書から見る限り、インドの音楽とペルシャの音楽のリズム要素の融合は、実際には18世紀になって初めて顕著な形であられるという、従来の見解を刷新するような事実が提示される。一方、13-14世紀とされるインドへのペルシャ音楽の紹介時期から18世紀にいたる間、それでは北インドの音楽文化はどのようなものであったのか、という新たな疑問については、周辺状況から、両方の音楽が独立して併存していたか、あるいは音楽実践から文献記述への昇華に一定程度の時間がかかったためか、どちらかであったであろうとし、さらなる研究の必要性を指摘しつつ、本論の課題であったヒンドゥスターニー音楽の成立過程の具体的検証を終えている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、インドにおいてペルシャ語で書かれた音楽書の解読を通じ、一般にインド音楽とペルシャ音楽の融合の産物であるとされてきたヒンドゥスターニー音楽が、具体的にどうやって現在の姿をとるようになってきたのかを、詳細に検討した労作である。

以下に本論文の学術的意義を三点あげる。

第一に、文献学的手法を用い、音楽という実践芸術の歴史を解明しようとした試みは未だに少なく、著者の研究の独自性が大いに発揮されていると言える。また、特にインドと西アジアにおけるリズム理論の詳細な分析について言えば、おそらくここまで微に入り細を穿った研究は、世界的にもそれほど多くはないと考えられ、その点で本論文の価値は高い。上でも触れたように、実践芸術である音楽の歴史を考える際には、当然、理論と実践の間の乖離というものが大きな壁として立ちふさがる。実際我々は過去に発せられた音を遡って再現することができない。著者はこの点を十分に承知した上で、それでも文献研究からどこまでのことが明らかになるかを懸命に検証している。このような著者の、ある意味でプラグマティックな研究姿勢は、実際に音楽のような実践芸術の歴史的研究を進めていく上では必要不可欠なものであろう。

第二に、文献学的にも、一般に知られた校訂テキストだけでなく、エディンバラ大学図書館所蔵の写本資料、あるいは著者が自らカシミールに赴いて入手してきた手写本の写真などの内容を紹介分析するといった注目すべき成果をあげており、この点も本論文が高く評価されるべき理由である。

しかしながら、著者はこのような文献学的研究のみにとどまらず、自身の得意とする実際のインド音楽演奏のパフォーマンスの分析と、文献研究の成果を組み合わせ、自らの議論に大きな説得力を持たせている。この点は、本論文が地域研究の大きな柱というべき、フィールドワークと文献研究の二つの作業を融合させたものであることを示しており、本論文の学術的意義の第三点目としてあげることができる。

以上のような研究の結果、著者が導き出した結論は、著者も触れるように「文化翻訳 Cultural Translation」や「文化間交渉 Transculturation」という、より大きな問題設定の中に統合され、考察されるべき問題であり、この点についても著者は十分な目配りを行い、今後の研究の方向性をしっかりと見据えている。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また平成29年2月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

